

看護大から こんにちは

Vol.9

2010
Autumn

宮崎県立看護大学 広報誌 MIYAZAKI PREFECTURAL NURSING UNIVERSITY PUBLIC MAGAZINE

CONTENTS

2-3 口蹄疫からの復興をねがって

4 卒業生の実践を知る会

5 歌声を届けるー音楽論の授業成果ー

6 短期海外研修

7 卒業生のしごとファイル

図書館だより

8 サークル紹介

大学祭の報告とお礼

MIYAZAKI PREFECTURAL NURSING UNIVERSITY
宮崎県立看護大学

チエンマイ大学からの留学生

臨地実習Ⅱ

フィールド体験実習Ⅰ・発表会

口蹄疫からの復興をねがって

口蹄疫と闘う地域での保健活動

川南町保健センター 保健師
高橋 里恵 (2009年卒)

みなさんこんにちは。9期生の高橋里恵です。私は今、川南町の保健センターで保健師をしています。就職して2年目の今年から保健センター配属となり、先輩方にご指導をいただきながら市町村保健師としての一步を踏み出したところです。皆さんもご存知のとおり、川南町は今年、家畜伝染病の口蹄疫による甚大な被害を受けました。町では、全国各地からの応援を支えに、町民一丸となって口蹄疫と闘ってきました。私たち保健師も保健活動を通して口蹄疫と向き合うことになりました。4月下旬の口蹄疫発生のお知らせとともに、現場での殺処分・消毒などの作業が始まり、私たちの仕事は防疫従事者の皆さんの健康チェックから始まりました。口蹄疫拡大のショック、慣れない殺処分、終わりの見えない連日の作業で、防疫従事者の方々が疲弊されていくのが手に取るように分かり、現場の厳しさを目の当たりにしました。必死の防疫も虚しく、全畜処分が決まり、現場には落胆の声が聞かれましたが、その一方で毎日届く支援の手紙、FAX、千羽鶴や作業に使うタオル、そんなひとつひとつに町民や防疫従事者のみならず、私たちまでもが元気をもらいました。作業が進むにつれて、私たちの活動は、訪問看護ステーションと連携した作業による傷病者の手当て、県や保健所と協力した被災家庭への心のケア訪問などへと広がっていきました。生活の術を失い、家族のように育ててきた大切な牛や豚を処分され、被災者からは「この先どうすればいいのか分からない」という先の見えない不安の言葉がたくさん聞かれました。その言葉を聞いているだけで胸が張り裂けそうになり、いかにこの口蹄疫がたくさんの人の日常を奪ったのかを知りました。しかしその一方で「川南はどうしても立ち上がらなければならない」「これでは終われない」という声もたくさん聞きました。川南町の「開拓魂」…この言葉の意味を知ったような気がしました。そして同時に、そんな川南町の保健師になったことに誇りを感じました。現在、口蹄疫の移動制限が解除され、町並みは戻りつつありますが、町民の方々に残された深い心の傷は簡単に癒えるものではありません。これからも一日も早い本当の意味での口蹄疫からの復興を目指して、保健師として自分にできることを頑張っていきたいと思います。



注(この原稿は7月末に書かれたものです)

口蹄疫からの復興をねがって

口蹄疫による健康被害予防を目指す取り組みに参加して

看護研究・研修センター長
小野 美奈子

このたびの口蹄疫では、約29万頭の家畜が殺処分され、畜産農家及び関連産業、その他関係者の方々の生活に大きな被害が及ぶ結果となりました。被災された皆さまには心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈り申し上げます。

本学でも、教職員一丸となって“口蹄疫が早く終息するように、今私たちができることを”の合言葉のもと、職員の防疫作業への従事、構内での消毒の徹底、募金活動、公開講座等の中止、実習の一部延期などを行ってきました。

そのような中、口蹄疫による健康被害を予防するため、県が実施主体となった「心とからだの健康支援チーム」による電話スクリーニング事業に、保健所保健師や看護協会の看護職と共に参加させていただく機会を得ました。

長引く災害の大きさを考えた時、被災農家の皆さまに健康障害が起こってはいないかということが大きな気がかりでした。被災農家にも支援者にも移動制限がある中、住民同士の支え合いも物理的に不可能です。支援が必要な方々を的確に把握し、市町村の保健師につなぐことで住民の健康を守りたい、という思いで電話相談に従事させていただきました。

受話器の向こうからは、被災農家の皆さまが、重度のストレス状況の中で生活をされている様子が伝わってきました。自分の家から感染を広げてはいけないという思いで過酷な日々の消毒作業に携わっておられる高齢者、移動制限のある中で近隣の人々や家族との交流を絶たれ孤独な生活を強いられている方々、殺処分された家畜の鳴き声が耳に残り不眠になっていることを訴えられる方など、語られる内容は私たちの想像以上の日常でした。このような方々には「保健師さんに訪問していただきますね」と伝え、なじみの市町村保健師の訪問支援に引き継ぎ、健康被害の予防、悪化防止を目指しました。

一方「近隣の人から防疫作業を手伝ってもらった」「友人の励ましが一番の力だった」と地域の支えがありがたかった、と語ってくださる方も多くいました。さらに「先のことは不安だけど再開に向かって頑張ろうと仲間と励まし合っている」「畜産以外の仕事をするつもりはない。再開目指して頑張る」という言葉も聞かれ、その力強さに私たち自身が勇気づけられました。

この電話相談に参加して私たちが学んだことは、どのような困難も克服していける人間の持てる力の大きさと、その力を支える地域住民・支援者のネットワークの重要性でした。

今、口蹄疫被害からの復興に向けて徐々にあゆみが進められています。県民一丸となった復興支援の取り組みに、地域住民の持てる力を支える地域ネットワークの一員として、私たち教職員も引き続き参加していきたいと考えています。

平成22年度「卒業生の実践を知る会」

就職対策委員 川村 道子

本年度から、開学を記念する行事として「卒業生の看護実践を知る会」を開催することになりました。この行事は、在学生と卒業生の絆を強め、本学の看護基礎教育と臨床現場教育の繋がりを強くすることを願って企画しています。今年は、県内病院のご協力を頂き、臨床経験3～5年になる5人の卒業生の心温まる発表を聞くことができました。在学生にとっては、授業や実習での学びと重なり、就職活動が始まる4年生にとっては、将来のありたい姿を描く機会になりました。当日は、卒業生が活躍する病院の師長さんや県病院局の方もお見えになり、本学教員を含めそれぞれの立場から看護教育の成果と課題を確認する機会にもなりました。

【発言者】 松尾 祐輔さん（H19年卒 宮崎大学医学部附属病院勤務）
村口 香織さん（H18年卒 県立延岡病院勤務）
工藤 沙季さん（H18年卒 医療法人同心会古賀総合病院勤務）
野村 明日香さん（H17年卒 宮崎生協病院勤務）
河野 真知子さん（H17年卒 社団法人宮崎市郡医師会病院勤務）

参加者の感想

3年次生 長谷川 雄二

まだ一度しか実習に行っていない私にとって、先輩が実際に病棟で向き合った事例の話聞くことは貴重な体験となりました。印象に残ったのは、骨髄穿刺の検査を受けることを怖がっていた子どもに対してのかかわりでした。子どもが抱えている検査への不安な気持ちを軽減するために、検査がどのようなものであるかを子どもなりにイメージ出来るように工夫していました。具体的には、人形や紙芝居の様なものを使って身体の中の様子を子どもなりに理解してもらい、その上で「ストローみたいなもので、背骨の中にあるお部屋の血液を吸って取り出して、そこに細菌がないかを調べるんだよ」といった具合に、子どもに分かりやすい言葉で説明し、その後検査を受けることが出来たということでした。私も、患者さんの不安な気持ちを少しでも減らして、前向きに病氣と向き合えるようにかかわっていくことで、患者さんの回復を促していけるような看護師を目指していきたいと思います。

4年次生 園田 亜弓

卒業生の看護実践を知る会に参加して特に心に残ったのは、助産師として働いている先輩の話でした。夢であった助産師として臨床に出たものの、母と子の二つの命を直接看護することの責任の重さに耐えられず、助産業務から離れ同病院の健診センターで保健師として勤務したそうです。健診時に赤ちゃんやお母さんと触れ合ううちに再び助産業務に戻ることを決意したということでした。現在は悩みや困った時にはチームメンバに相談するなど、周囲の方に支えられながら頑張っているということでした。私は、今まで「就職してうまくやっていけるだろうか」と漠然とした不安を持っていましたが、『周囲の方々に力を貸していただきながら成長していけばいい、頑張っていけそう』と思うようになりました。先輩方のように活躍していけるよう、残りの学生生活を有意義に過ごしていきたいと思えます。



歌声を届ける—音楽論の授業成果—

7月22日・23日に第41回日本看護学会—精神看護—学術集会（主催：日本看護協会、宮崎県看護協会）が、宮崎市のワールドコンベンションセンター・サミットで開催されました。「“こころの健康をめざして～紡ぐこころ♥つながる地域～”というテーマのもと開催される学会に、看護を学ぶ学生が届ける歌声は、全国から集う看護職の皆さんへの大きなメッセージとなる」という主催者、担当教員、学生たちの思いがひとつになり4月からの取り組みが始まりました。学会当日、参加者からは「澄んだきれいな歌声…心に響くハーモニー…感動して鳥肌が立った…看護大生にこんな形で迎えられるっていいですね…」等々沢山の言葉をいただきました。学生にとっては、学びを確かなものとすることができ、貴重な学習成果発表の場となりました。

第41回日本看護学会準備委員：川原 瑞代

「音楽・出会い・感動 ～音楽論の授業を終えて～」

担当教員 山下 恵子

私たちの身近な所にはたくさんの音楽があります。誰かと一緒に歌や合奏、音遊びができれば、一人で音楽をするよりも、心が温まる楽しい時間になるのではないのでしょうか。「共に音楽をすること・人とつながること」をテーマに「音楽論」の半期の授業を終えました。今年は、日本看護学会のオープニングセレモニーでの発表のチャンスも頂き、104名の1年生全員で「手紙」の合唱に取り組みました。看護の専門家を目指す学生が合唱に取り組むということで、心配する声も聞かれましたが、回を重ねるごとに歌声は一つとなり、「やればできる」という学生の可能性を見せていただきました。本番当日のサミットホールでは、心をつにして歌い上げることができ、その一生懸命な眼差しと歌声を私は忘れることができません。「音楽・出会い・感動」の瞬間だったと思います。音楽は時間の芸術です。今という瞬間はもう二度と来ません。だから今の瞬間を共に精一杯生きようねという音楽をしている時の私の想いは、学生たちにしっかり伝わったようです。この音楽体験を、看護に生かしていただくことを願っています。私に「音楽・出会い・感動」の時間を与えてくれた104名の学生とそれを応援して下さった先生方に心より感謝申し上げます。

「合唱を終えて」

1年次生 谷口 直弥

私たち一年生は、精神看護学会のオープニングで合唱を任せられ、それに向けて練習を積んできました。会場であるシーガイアに向かうバスでは、皆、緊張した面持ちでした。

会場につき、練習が始まると、早朝でもあり声が出でない、指揮と歌がズレているなど、本番直前に様々な問題が出てきました。皆の顔に不安がつきまとったのを今でも覚えています。しかし、それはただの杞憂になりました。一年生の誰かが場の雰囲気を見て、冗談を言い皆をリラックスさせたのです。それ以降、計測したかのように呼吸のタイミングが合い、のびのびと力強い歌声で歌うことができました。本番では、さらに実力以上の力を発揮できた気さえます。この合唱を通して、一年生は努力や皆を思う気持ちや達成感など多くのことを学んだ気がします。



短期海外研修

サンノゼ短期留学を終えて

専門基礎科目 助教 毛利 千祥

2010年3月、米国カリフォルニア州サンノゼ市で、ホームステイと看護・医療の現状に触れるプログラムに、1年次を終えたばかりの学生2名が参加しました。武蔵野大学看護学科との共催により、幸運にも関東で同じく看護を学ぶ学生達との交流にもなりました。学生が自分の気付きを自覚できるよう、また現地の状況を国内の状況に重ねながら学生の学びを深めるという目的で、教員が現地指導者として同行しました。

参加者の声より

アメリカでの生活をふまえて、現地の大学や高校・病院などを実際に訪問できることに魅力を感じて参加しました。印象に残ったことは、主体的な人が多いということでした。幼稚園や高校、大学では、日本や私たちに興味を持って積極的に声をかけてくれる現地の方々と交流しました。また、仕事に就いた後や大学を出た後にもう一度大学に通いなおす人が多くいることを知りました。

2年次生 吉村知恵

現地で、医師・看護師などが職種を問わずに患者のことをディスカッションしている光景が印象的でした。また、ウェルネスフェアで、1年次に学んだ指圧を実践させていただく機会もいただき、言葉はうまく話せなくて、ただひたすら呼吸の合図とともに肩こりや目疲れのツボを押していました。たくさんの方が興味を持ってくださり、リフレッシュした表情で‘Thank you!’と言ってくれたことで、看護大生としても大きな自信につながった気がします。

2年次生 大久保 香織



サンノゼ州立大学で学生イベント(ウェルネスフェア)に参加し、授業で習った指圧を参加者に行った時の様子

フィンランド留学を終えて

4年次生 澤野 友美

私は3月9日～29日の21日間、短期海外派遣支援プログラムに御支援いただき、フィンランドの二都市と、フランスのパリに行ってきました。フィンランドを選んだのは、育児支援が手厚い国での子どもたちの生活を見たかったからです。実際に子どものいる家庭にホームステイをし、また子ども病院の見学をしました。

ホームステイでは日本のお菓子や紙風船、折り紙を準備し、羽が動く鳥や大きな音の出る紙鉄砲など興味を持ってくれそうな折り方を調べていきました。結果は大成功！子どもたちは大喜びしてくれました。夫婦は私が育児制度に興味があることを伝えると、色々と国の支援について教えてくれ、実際に利用している人の意見を聞いたことが新鮮でした。子ども病院では子どもの権利が尊重され、遊びなどを通して子どもが病気と向き合っていく力をつけることが大切と考えられていることを学びました。フィンランド滞在のあと、パリに飛びました。

パリでは観光地を回り長い歴史を感じ、また在仏日本人の方に育児制度のお話を聞いたりしました。二カ国に行って感じたことは、両国とも子どもたちを国の財産と考え、国の文化や誇り、歴史に基づいた教育、支援をしているということです。この旅での学びを今後に生かすと共に、旅を助けてくれたすべての人々に感謝します。ありがとうございました。



卒業生のしごとファイル019



県立宮崎病院 木原 亜由美 (2008卒)

私は今、県立宮崎病院の内科病棟で働き3年目になります。化学療法や透析をしている患者様などさまざままで、急性期病院ですが終末期の患者様を看取することもあります。就職して1年目の頃は毎日の業務に精一杯で看護ができていたのか、本当に私はこの仕事に向いているのだろかと悩んだ時期もありました。今では3年目になり病棟での役割も増え、少しずつではありますが自分にできることも増えてきました。3年目に入ってすぐの頃、夜勤をしている時でした。患者様は腫瘍が気管を圧迫しており、いつ呼吸が止まってもおかしくない状態にありました。息が苦しい、苦しいと訴えられて血痰が続いていました。呼吸がづらい中一晩中患者様は過ごされました。他の患者様の急変があったためその患者様に関わったことといえば、合間に訪室し声をかけることしかできませんでした。その後、患者様は挿管され緊急手術となりましたが、呼吸状態も改善し無事に退院を迎えることができました。退院日が近くなったある日、「あの時はありがとね。」と言われた時には胸が熱くなり、看護師をしていてよかったと思いました。

今後は、退院や転院がスムーズにいくように調整していく役割を担っていきたいと思っています。これからも患者様の在宅での生活などをイメージしながら日々の看護に取り組んでいきたいと思っています。



筆者は中央

附属図書館に立ち寄ってみませんか



図書館職員 土持 あい

宮崎県立看護大学附属図書館は、一般開放されていて、だれでも利用できます。とはいえ、たくさんの専門書の中から、読みたい本をさがすのに、戸惑う利用者の方も多いようです。近年、医療者が患者の気持ちを理解するために、また、病気になった時に体験者の話を知るために、闘病記コーナーを設ける図書館が増えてきたようです。看護大学図書館でも「精神疾患に関する本はありませんか？」など、聞きづらそうに聞いてこられる方がいらっしゃることもあり、闘病記コーナーを設置しようということになりました。

研修先で闘病記コーナーを設置した大学図書館の方から直接、話を聞く機会を得、2009年の4月頃から本格的に取り組み始めました。まずは、たくさんの本の中から、一冊一冊中身を確認めながら、患者の視点で書かれている本を集めます。そして、設置場所を決め、データを入力し、ラベルを貼る作業など、約2カ月かけて準備を行いました。一番大変だったのは、さまざまな形態で書かれてある本を、がん、小児疾患、精神疾患など、内容ごとに分類する作業でした。専門的な知識の豊富な館長にアドバイスを受けながら作業を進めていきました。当初、129冊からのスタートでしたが、新刊や話題の本などを追加して、現在は385冊になっています。ドラマ化された「ツレがうつになりまして。」「余命1カ月の花嫁」なども入っていて、よく読まれています。

闘病記コーナーを設置して、学生や一般の方が次々に本を借りていく様子を目にしたり、新聞やテレビの取材を受けたりなど、その反響の大きさに驚かされました。これからも、闘病記コーナーを充実させ、看護大の特色を生かして地域に貢献できる魅力ある図書館をめざしていきたいと思います。



サークル紹介

楽球サークル

2年次生 堀 亜也加



こんにちは。楽球(らっきゅう)サークルです。どんなサークルかと思われる方もいるでしょう。答えはとても簡単です。楽しく球技をしようサークルです。主に毎週水曜日、放課後の体育館で1年生6人、2年生13人、4年生10人、顧問である新田先生のもとで活動しています。

3年生がいないじゃないか…?そうです、いないのです。ということで、私は5、6代目部長をつとめることになっています(笑)。それはさておき、活動内容はバレーボールを主として行っています。その他にはバスケットボール、卓球、ドッチボールなどもしています。高校時代に運動部だった人はもちろん、そうでない人もたくさんいます。あくまでも“楽しく”ということが前提なのでトレーニングなどは行いません。上手い人がいたり得意じゃない人がいたりすることで場が和み、たくさんの笑いが生まれます。

イベントとしては新入生歓迎会、夏にはキャンプを開催しています。川で泳いだり、バーベキューをしたり、先輩方や後輩達と語り明かしたり、とても楽しいイベントです。また、看護師という同じ夢を持っているので先輩や後輩と悩みを共感したり相談にのってもらったり、大学生活の糧にもなっています。これから先もメンバーがこのサークルに入っていてよかったと思えるよう活動をしていきたいです。とっても明るく楽しく賑やかな楽球サークルをよろしくお願いします。

大学祭の報告とお礼

大学祭実行委員長 森重 優香

平成22年5月15日、16日に、第13回公孫樹祭が行われました。両日とも良い天気にも恵まれ、予定通り公孫樹祭を行うことができ、たくさんの方々にお越し頂けたことをとても嬉しく思います。ご協力頂いた皆様に、厚く御礼申し上げます。

今年の大学祭では、新しい取り組みとして「ナース喫茶」を開きました。宮崎県立看護大らしく、地域の方々に健康を意識しながらも食生活を楽しんでもらおうと健康的なスイーツを考え、準備しました。メニューはおからホットケーキ、豆腐ドーナツ、バナナパウンドケーキです。どれも皆様においしいと言っていたことができました。また、地域の方々とお話をする貴重な機会となり、とても良い空間となりました。始めは新しい取り組みに不安が募り、誰も来てくれなかったらどうしよう、と考えていました。しかし、小さなお子さんからご年配の方まで足を運んでいただき、たくさんの方の笑顔を見ることができました。ご協力いただいた皆様、ご来場くださった皆様、本当にありがとうございました。

3年次生 吉田 愛

行事予定

- ◆10月1日 後期授業開始
- ◆12月25日
～1月7日 冬季休業
- ◆3月4日 後期授業終了
- ◆3月16日 卒業式

宮崎県立看護大学

平成23年度入学者選抜試験について

本学の平成23年度学部入学者選抜試験を次のとおり行います。現在、出願方法などを記載した冊子(学生募集要項)を配布しています。

●募集人員及び試験日

区分		募集人数	選抜試験日
特別入試	推薦	県内25名 県外3名	11月27日(土)
	社会人	2名	
一般入試	前期日程	55名	2月25日(金)
	後期日程	15名	3月12日(土)

●お問い合わせ 宮崎県立看護大学事務局学生担当
TEL.0985-59-7705

広報誌に関するお問い合わせ／ご意見

〒880-0929 宮崎市まなび野3-5-1 宮崎県立看護大学 看護研究・研修センター

TEL:0985-59-7700 / FAX:0985-59-7771(ホームページ)http://www.mpu.ac.jp/ (メール)info@mpu.ac.jp